

館林キリスト教会 デボーションノート（2025年）

12月1日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 12章1～6
「信仰の完成者イエス」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU121.mp3>

ヘブル人への手紙12章の初めの部分は、12章全体の要約であり、この手紙全体の最も素晴らしい箇所だと言われています。1節には「わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか」と、クリスチャン生活を徒競走にたとえて記しています。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者は一部の人という厳しい現実があります。けれども神様は、信仰生活においては、「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ」（2節）走り抜いたランナーに、すべて義の冠を授けてくださる（Ⅱテモテ4：8）という約束を与えておられるのです。しかも心強いことに、イエス様が責任を持って終わりまで導いてくださるのです。

12月2日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 12章4～11
「愛の訓練」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU122.mp3>

著者は、クリスチャンの上に臨もうとしている厳しい信仰の試練を予想し、神様が与える苦難の意味に対して3つの理由をあげて説明し、励ましているのです。第一は、箴言3章11、12節の言葉を忘れてはならないということ。神様の御手は、喜ばしい時だけでなく、困難な時、苦しい時にも信じる者に働いているということです。第二は、父は愛する子のために、自分を犠牲にしても、子の成長と成熟を願うものです。だから、時に厳しく懲らしめを与えることもあるのです。肉の父がそうならば、まして魂の父は、愛の訓練として、時に厳しい苦難を与えることもあるのです。第三は、神様が与える苦難には必ず平安な義の実を結ばせるという目的があるのです。それは果樹が実を結ぶのに、自然の厳しさに耐えて実を結ぶのと似ています。

12月3日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 12章11～17
「手とひざをまっすぐに」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU123.mp3>

信仰生活において「わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走り抜こうではないか」（1節）という勧めに生きるために、12節には「それだから、あなたご自身がたのなえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐにしなさい」とあります。走り抜くためには足腰が鍛えられてしっかりしていなければなりません。み言葉に教えられ、祈り、鍛えられた信仰の歩みを重ねる日々でありたいと願います。かけっこで転んでもすぐに立ち上がりゴールを目指すように。さらに互いの平和、清さを求める生活。苦い根、すなわち、この世に心奪われ不信仰に陥って、神様から離れないように。またエサウのように、霊的な祝福を軽ん

じてはならないと教えられています。

1 2月4日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 12章18～29
「天のエルサレム」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU124.mp3>

これは、十戒授与に先立つシナイ山での近づきがたい神様の御臨在の様子です。しかし、キリストにある者が近づいているのは、シオンの山、すなわち、生きておられる神の都、天のエルサレム、祝会に集う無数の天使の群れ、天に登録されている長子の教会（相続権は長子にあり、長子キリストのゆえに祝福を受継ぐ者とさせていただきます）。キリストにあって義とされ時代を超えて天に集う人々。これらはキリストの贖いの恵みです。荒野のイスラエルのように御声を拒むことがないように。やがて新しい天と地が現れるのですから。焼きつくす火であられる神様の御臨在に耐え得ない罪人ですが、キリストのゆえに受け入れられ、天の都の市民とさせていただきますから、恐れかしこみつつ、神様に喜ばれるように日々仕えましょう。

1 2月5日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 13章1～6
「兄弟愛に生きる」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU131.mp3>

1～6節までには2つの勧めがあります。その1つは、「兄弟愛を続けなさい」という勧めです。2節には、その愛の広がりや自然と旅人にとどくように勧められています。さらに3節では、その愛の波紋は獄に繋がれている人たち、苦しめられている人たちにまで広がっていくようにという勧めです。4節以降は、このような兄弟愛に生きる者が、結婚生活から始まり、労働によって賃金を得、家族を養っていくという生活において間違いのないようにという戒めです。そこで金銭に執着してはいけない、貪欲であってはいけない、慎ましく生きることなどを勧めたのです。これらは当たり前的事かもしれませんが、兄弟愛に生きるとは、当たり前的事を主の前に誠実に行うということなのです。

1 2月6日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 13章7～17
「神の言を語る指導者」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU132.mp3>

ヘブル13章の中には「指導者」という言葉が繰り返されています。17節にも24節にも出てきます。そして前後関係から見ると、現代の牧師の仕事をしていると思います。「神の言」とは（7節）、ルカによる福音書5章などを見ると、神様がイエス様を通して語られる言葉のことであることがわかります。そして7節の言葉は、原文では「あなたがたに語った、あなたがたの指導者たち」と書かれてあります。「あなたがた」が繰り返されているのは、よく知っている指導者のことだと思います。そして、こうした指導者のことをいつも思い起こすように、さらに彼らの生活の最後を見て、その信仰に倣うように勧めたのです。これらの勧めを読みますと、私たちに神の言を語り、その解き明かしをしてくださった小林牧師の事を思い出します。

1 2月7日 今日的通読箇所 ヘブル人への手紙 13章18～25
「羊の大牧者」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/58HEBU133.mp3>

今まで読み進めてきましたヘブル人への手紙も最後の交読になりました。難しい箇所が多かったですが、キリストの血による新しい契約の意味が何度も記されていました。旧約時代から繰り返し捧げられてきた多くの動物の犠牲。礼拝のたびに流された動物の血。しかし、ただ一度十字架で捧げられたキリストのお体。流されたキリストの血潮により、彼を信じる者に罪の許しが与えられ、永遠の命が与えられること。キリストにあって、神の相続人としていただいたこと。やがて現れる天の都エルサレム。多くの信仰の証人たちのように、天のふるさとを目指して旅をします。その間、養い導いてくださる方は「永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエス」さまです。(20節)

1 2月8日 今日的通読箇所 詩篇 第43篇1～5
「神の祭壇に行こう」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE043.mp3>

クリスチャンでも時には、神さまから離れたような、神さまから見捨てられたような、不信仰、疑惑、寂しさに襲われることがある。悔い改めない自分の罪に原因があることもある。困難な境遇のためかも知れない。しかし原因不明の時もある。詩人は言う「わが魂よなげうなだれるのか。思い乱れるのか。わたしにはなお神の助けがある。さあ祈りつつ神を待ち望もう。やがて解放されて神を賛美する時がくる」と。信仰の自問自答、自分の魂の激励。本篇はそのままでの詩篇の続きだ。

1 2月9日 今日的通読箇所 詩篇 第44篇1～26
「神の沈黙」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE044.mp3>

ここで詩人は、かつてはイスラエルを祝福し救いたもうた神が、今は沈黙してその苦難と敗北を見殺しにしているのを感じて苦しむ。悔い改めない自分の罪にその原因があることもある。しかし祈ってみても別に思い当たらない。それなのに祈りに手応えもなく依然神は沈黙している。ある人はこれを「霊的乾燥」という。祈りつつこういう苦しい場面を切り抜けるのも、信仰の大切な秘訣の一つだ。

1 2月10日 今日的通読箇所 詩篇 第45篇1～17
「王と王妃」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE045.mp3>

近日イギリスのチャールズ皇太子夫妻が来日されるそうだが、彼らはいま世界で最も人気のあるカップルの一組だろう。この詩篇に歌われているのは昔のイスラエル王とその妃の美と栄光である。とともに、やがて再臨の日に現れる、新郎なるキリスト、新婦なる教会の美と栄光の歌でもある。黙示録に「小羊の

婚宴の時がきて花嫁はその用意をした」と書かれている、我々の希望と喜びの時である。

1 2月11日 今日に通読箇所 詩篇 第46篇1～11
「休息と礼拝」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE046.mp3>

[10節]「静まってわたしこそ神であることを知れ」を「余暇を確保せよ。そして礼拝に出席せよ」と訳した人がいる。過労でも病気にならないという人はいないし、また休まずに治る病気もない。ところが今は日本中が心身の過労に馴らされ、休みかたも知らない季節だ。ただもう一本調子で、人の言葉を聞いて「それもそうだ」と言えないし「あの手この手」の工夫もできないから自殺が流行る。家族とともに聖日の休息と礼拝を確保し、それを習慣づけることで、我々クリスチャンはその中から救われていると思います。

1 2月12日 今日に通読箇所 詩篇 第47篇1～10
「主は統べ治める」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE047.mp3>

わたしが若い時に指導をうけた舟喜先生は、戦争中、教団の委員長として苦勞された。ある日のこと、外部の圧迫と教団内部の沈滞萎縮に追詰められて、何の打つ手もなくただ疲れ果てて、外から帰ってくると、書齋のテーブルの下に頭を突っ込んで、ただ悲しんでいた。しばらく祈りのあと、ふと「神はもろもろの国民を統べ治められる」というみことばが心にひらめいた。「その時、一切の困難と疲れ、敗北感は即座に消滅し、立ち上って神を賛美した」と話してくれた。わたしはこの話を今も忘れず、しばしば思い出します。

1 2月13日 今日に通読箇所 詩篇 第48篇1～14
「神の都」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE048.mp3>

イスラエル人にとってエルサレムは喜びと誇りの都で、その中に立つ神殿は、神の臨在と祝福のシンボルだった。国家と家庭の喜びの時、反対に戦争やききんの試みの時、人々は神殿に集って祈った。それはクリスチャンにとっての教会と似ている。「神よ、われらはあなたの宮のうちで、あなたのいつくしみを思いました」「そのやぐらを数え、その城壁に心を止め、そのもろもろの殿をしらべよ」などは、現在、教会を愛している大勢のクリスチャンの心そのもののように思われる。

1 2月14日 今日に通読箇所 詩篇 第49篇1～20
「富のちから」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE049.mp3>

マルコス大統領の莫大な財産は、この頃新聞に書きたてられて世界を驚かせた。ここに詩人は言う。「富をもって人は魂をあがなうことはできない」「彼が生涯自分を幸福に感じて、また人から賞賛されても、やがて彼はまっすぐに墓に

下る」「彼が死ぬとき、富も栄華も、何も携えてゆくことはない」。しかし救われた者は「神はわたしの魂を受け、よみの力からあがない出される」と。

1 2月15日 今日に通読箇所 詩篇 第50篇1～15

「真の礼拝」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE050.mp3>

[7節～13節]に、いかにも豊かで立派だが真の礼拝に関係ないものが記してある。そして言う。「感謝のいけにえを神にささげよ。なやみの時に主を呼べ」これが真の礼拝であると。与えられている恵みのために、常に真実に神に感謝する。当面する困難や問題のために、あわてず絶望せず、信仰をもって神に助けを祈り求める。これこそ生活の中の生きた礼拝、神の求めたもう真の礼拝であると。

1 2月16日 今日に通読箇所 詩篇 第51篇1～19

「砕けた魂の詩篇」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE051.mp3>

神の祝福に溢れた、勇ましいダビデはりっぱだが、かくも謙遜真実に悔改めている彼の姿もまた美しい。中国の言葉に「君子の失敗は日蝕のごとし。欠けるや万民これを見る。回復するや万民これを仰ぐ」とあるが、アブラハムの場合もダビデの場合も本当にそうだ。有名なインド宣教師ウイリアム・ケアリーは、生前から「自分の葬式には、この1節2節から説教してくれ」と頼んでおいたそうだ。

1 2月17日 今日に通読箇所 詩篇 第52篇1～9

「裏切り者」

「落ちぶれて袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」という歌がある。

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/19SIHE052.mp3>

ダビデは理由なくサウル王に追われ、エルサレムを亡命しなければならなかったとき、神殿に祭司を訪ねて祈りを求め、これからの身の振り方を相談した。ところがちょうどそこに居合わせた異邦人のドエグが、この様子をサウルに密告したので、これがサウル王の祭司の町虐殺事件にまで発展することになった。ここにダビデはこの裏切り者のために神の正義に訴えて、彼らの裁きを祈らざるを得ないのだ。

1 2月18日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章1～13

「悔い改めと洗礼」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU011.mp3>

マルコによる福音書は「神の子イエス・キリストの福音のはじめ。」という言葉で始まっています。父なる神様が御子イエス・キリストをこの地上に送ってくださり、人間の救いを完成してくださった事実を書き記しています。第一章はバプテスマのヨハネが荒野に現れ、悔い改めのバプテスマを授けた記事から書き出されています。神様に対する真実な悔い改めの印としての洗礼でした。悔

い改めとは、罪を悔いるだけでなく、神様を信じて従う、という生き方の方向転換をすることです。バプテスマのヨハネの役割は人々にイエス様を信じる心備えをうながすためでした。

1 2月19日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章14～20
「神の国は近づいた」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU012.mp3>

イエス様はカペナウムを拠点にしてガリラヤ湖周辺で宣教をなさいました。「神の国は近づいた」とは旧約聖書における神様の約束が成就するために、神様が定めておられた時がきた、ということです。「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」（ルカ福音書17章21節）とイエス様はおっしゃいました。イエス様がおいでになったことによって、イエス様の教えとみわざにおいて神の国はすでに来たことと、イエス様が再臨なさる時この世の終わりに成就するという両面があります。悔い改めと信仰によって神の子、神の国の民としていただけるのです。

1 2月20日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章23～34
「権威あるイエス様の教え」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU013.mp3>

ユダヤ人の会堂では、ラビ（先生の意味）の資格のあるいろいろな人々に、神様のお話をしてもらった。その中でもイエス様の教えは、特に力があつた。また、律法学者と言われる人々もいたが、言葉の説明や指図をするばかりで力がなかった。イエス様のお話に不思議な力があつたのは、神の権威があつたからだ。ここには三つの奇跡が記されている。はじめは、汚れた霊を追放されたこと。現代も、悪霊との戦いが盛んだから、イエス様から目を離さないことが大事だ。次に、ペテロのしゅうとめを癒したこと。そして、夕方によくの様々な病人をみな癒されたことである。いずれも神様の権威ある力と愛を感じる。

1 2月21日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 1章35～45
「イエス様の使命」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU014.mp3>

イエス様は、夕方から詰めかけてきた病人や悪霊につかれた人々を、みな癒してあげた。その翌日には、夜が明ける前から祈りに専念されている。父なる神様との交わりなしに一日を始めることが出来ないからだ。朝、弟子達がイエス様を追ってきて、「人々があなたを探している」と言った。しかしイエス様は、その求めに応じず、「ほかの、附近の町々にみんなで行って、そこでも教えを宣べ伝えよう。わたしはこのために出てきたのだから」（38節）と仰せられた。イエス様には、みことばを宣べ伝え、人類の為に十字架にかかり救いのみわざを完成させる使命がはっきりしていたからだ。続いて、重い皮膚病の男の求めに応じ、当時触れるのを禁じられていたにも係らず、彼にさわり「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われ癒してあげた。

1 2月22日 今日的通読箇所 マルコによる福音書 2章1～12
「あなたの罪はゆるされた」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU021.mp3>

イエス様はガリラヤ湖周辺の町々で神様のみ言葉を大勢の人々に伝えていらっ
しゃいました。ご自分の町カペナウムに戻られた時、ある家でお話をしておら
れました。そこへ人々が四人の人に運ばせて一人の病気の人を連れてきました。
群集のために近寄ることができないので、驚いたことに彼らは屋根をはぎ、病
人を寝たままイエス様の目の前につり降ろしたのです。イエス様は彼らの信
仰をご覧になって「人よ、あなたの罪はゆるされた」と宣言してくださいまし
た。他の人の罪のゆるしを宣言できる人間はいません。なぜなら自分にも罪が
あるからです。罪のない、神のひとり子イエス様だけが、罪をゆるすことがお
できになります。それがよくわかるように、病気をも癒してくださいました。

1 2月23日 今日的通読箇所 マルコによる福音書 2章13～22
「新しい皮袋に」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU022.mp3>

このヨハネとはバプテスマのヨハネです。断食をして悔い改め、あわれみを求
める時代は過ぎ去り、長く待ち望まれた救い主イエス様がおいでになりました。
イエス様を信じて罪ゆるされた喜びに生きる、という祝福がだれにでも与えら
れる時代がきたのです。これをイエス様は婚礼の喜びに例え、さらに二つの表
現をなさいました。真新しい布ぎれを古い着物に縫い付けるなら、新しいつぎ
は古い着物を引き破りその破れはひどくなる。また、盛んに醗酵する新しいぶ
どう酒は古い皮袋をはり裂き、ぶどう酒も皮袋もむだにしてしまう、新しいぶ
どう酒は新しい皮袋に入れるべきだ、と。信仰によって罪を悔い改めイエス様
を救い主として信じたなら、イエス様にふさわしく歩み始めるべきですと。

1 2月24日 今日的通読箇所 マルコによる福音書 2章23～3章6
「安息日論争」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU023.mp3>

イエス様と弟子たちは、安息日に麦畑を通りかかり、弟子たちが空腹のため、
穂を摘んで食べた。パリサイ人がそれをとがめたことから安息日をめぐる論争
が始まった。この論争は三つの段階を経ている。第一は、パリサイ人の批判で、
安息日にはしてはならないことが問題にされている。第二は、イエス様の答えか
ら、安息日は何のためにあるのかを問題にしている。第三は、安息日はだれの
ためにあるかを明確にしている。28節の「人の子は、安息日にもまた主なの
である」と言って、御自身がメシヤであると宣言したのはよく知られている。
イエス様は、3章の初めの部分で、安息日が積極的に善を行う日である事を説
いた。またイエス様を罫に陥れようとして引き出した片手のなえた人を癒し、
安息日が善を行うためである事の模範を示した。

1 2月25日 今日的通読箇所 マルコによる福音書 3章7～19
「12人の弟子たちの選出」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU031.mp3>

イエス様は、パリサイ人たちやヘロデ党の者たちがイエス様を殺そうと相談しはじめたことに気づかれた時、ガリラヤ湖のほとりへ逃れました。しかしそこにも大勢の病人や汚れた霊を持った人々が押し寄せて来たので、その人々を癒してあげました。それからイエス様は山に登られ、祈りのうちに12人の弟子たちを選ばれました。イエス様は弟子たちに「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ 16:15)と命じました。その弟子たちとは、無学なただの人たち(使徒 4:13)、取税人、雷の子(気短な者)、裏切り者たちでした(マルコ 3:16~19)。主は、そのような者たちをあえて選ばれたのです。同様に私たちも、小さな取るに足りない者であっても、主の働きに参加できる幸いを覚え感謝していきましょう。

12月26日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 3章19後半~35
「解放してくださる方」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU032.mp3>

この家は、カペナウムのペテロの家だったようです。イエス様のもとへ群衆が押し寄せて来ました。イエス様の家族は、イエス様が普通ではないと思い取り押さえようとするほどでした。律法学者たちはイエス様を、悪霊につかれていると非難しました。イエス様は次のようにおっしゃいました。国も家も内輪もめをしては成り立たない、悪霊が悪霊を追い出すだろうか、「強い人」すなわち悪霊は、人間を罪と死の奴隷にし「家財」のように閉じ込めている、この人を解放するには、強い人を縛り上げる必要がある、わたしが悪霊を追い出すのは、悪霊よりもはるかに強いのだ、と。そして、故意に聖霊の働きを否定する者は許されないと、厳しく言われました。

12月27日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 4章1~20
「信仰によって」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU041.mp3>

海べとは、ガリラヤ湖のことです。イエス様はガリラヤ湖に舟を浮かべて、岸辺からなだらかに続いている丘に集まった「おびただしい群衆」にお話になりました。これはみ声がよく響く自然の聴衆席でした。有名な種まきの譬えで、四種類の土地が出てきます。やわらかく耕された畑に蒔かれた種は、よく育ち、何十倍もの実を結びました。種は神様のみ言葉です。畑は人間の心を表しています。イエス様はこの譬え話の解説のはじめに、12節で、イザヤ書のみ言葉を引用して、神様のみわざを見ても、神様のみ言葉を聞いても、柔らかな心で信仰によって受け入れなければ、悟ることができず、豊かな実を結ぶことができないことを警告なさいました。

12月28日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 4章21~34
「神の国の福音」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU042.mp3>

ここには4つの譬が語られている。前半の25節までには、神の国の福音に耳

を傾けることが強調されている。まずイエス様は「あかり」の譬を用いて、隠れている神の奥義も、真剣に求めれば必ず悟ることが出来ることを教えた。次に「はかり」の譬を用いて、神の恵みを真剣に求めるものに、その恵みが増し加えられることを教えた。26節以降には、「成長する種」と「からし種」の譬から、神の国の姿を語られた。第一は、神の国が、この種のように、人間の思いや力の及ばないところでどンドン発展していくということである。第二は、神の国は、地上のどんな種よりも小さいからし種が、どの野菜よりも大きくなるように、ガリラヤ出身の弟子たちの小さな集団から始まったが、世界中のどの国よりも大きくなっていくという事である。

12月29日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 4章35～41
「なぜ信仰がないのか」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU043.mp3>

イエス様が弟子たちと一緒に舟に乗り、ガリラヤ湖の向こう岸に渡ろうとされた時、激しい嵐に見舞われた。この嵐はガリラヤ湖の四方が山に囲まれているという特有の地形からくるものだ。弟子たちの中には、ガリラヤ湖で漁師だった者がいたにもかかわらず、あわてふためき動揺した。彼らは舟の舳の方で眠っておられたイエス様に対し「わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と非難して叫んだ。するとイエス様は起きあがり、「静まれ、黙れ」と言って、この嵐を一言で静められた。イエス様が、自然界をも支配するお方であることを示された奇跡だ。この出来事は人生の厳しい嵐を乗り越えるにも、イエス様に対する「信仰」が必要であることを私たちに教えてくれる。

12月30日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 5章1～20
「レギオンからの開放」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU051.mp3>

イエス様たちがガリラヤ湖の向こう岸に着くと、墓場をすみかとしている人が出て来ました。彼はけがれた霊につかれ、足かせや鎖を砕きひきちぎり、石でからだを傷つけ奇声を上げていました。彼はイエス様を拝し「…わたしを苦しめないでください」と願ったのです。彼を拘束しているけがれた霊「レギオン」が底知れぬ所に追いやられるのを恐れて発した言葉でした。レギオンとは四千から六千の軍団を意味します。しきりに願ったので豚には入り込むのをお許しになりました。二千匹あまりの豚はがけから海へ駆け下りおぼれ死にました。ほかの人にも、本人にもどうにもできないでいるこの人を、イエス様は本来の姿に立ち返らせて下さいました。

12月31日 今日に通読箇所 マルコによる福音書 5章21～43
「恐れることはない。ただ信じなさい」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU052.mp3>

今朝は長い箇所ですがゆっくり交読しましょう。イエス様は舟で向こう岸へ渡られユダヤへ戻って来ました。すると会堂司ヤイロが足元にひれ伏し、死にかかっている幼い娘に手を置いて助けて下さいと願いました。イエス様と一緒に

出かけ、群衆もイエス様に押し迫りながらついて行きました。この群集に十二年間も病気で苦しんでいた女の人がまぎれ込み、うしろからイエス様のみ衣にさわりました。彼女は多くの医者にさんざん苦しめられ、持ち物をみな費やしても悪化していたのです。み衣にさわれば治していただけたと思った彼女にイエス様は「あなたの信仰があなたを救ったのです」と言ってくださいました。そうこうしているうちにヤイロは娘の死を知りましたが、イエス様は「恐れることはない。ただ信じなさい」とおっしゃり、娘を生き返らせてくださいました。